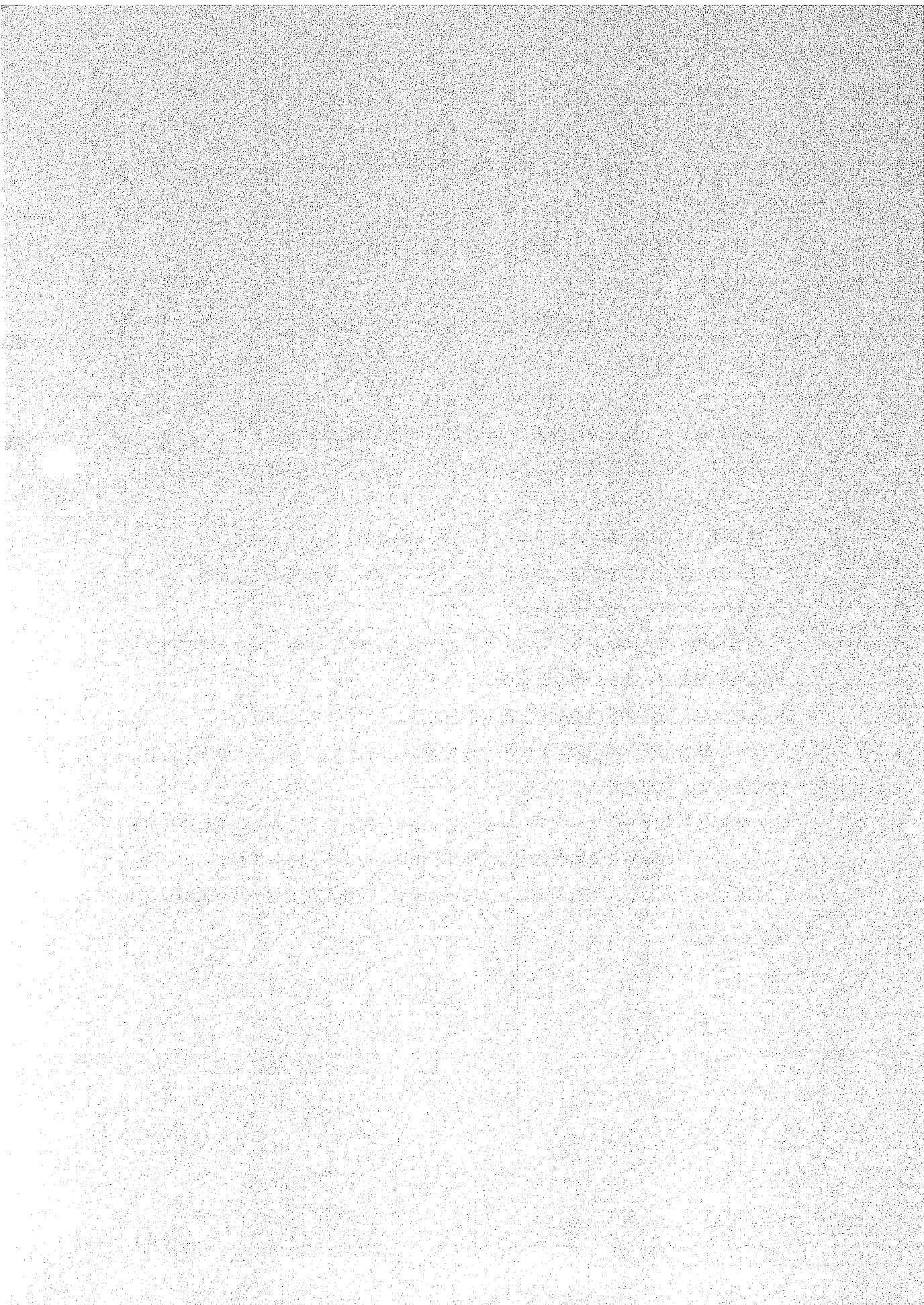


2019 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 14:50~15:50 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類があります。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないようにしてください。
7. 一度記入したマークを修正する場合、しっかりと消してください。消し残しがあると、マーク読み取り装置が反応して解答が無効となることがあります。
8. 満点が100点となる配点表示になっていますが、文学部国文学専攻の満点は150点となります。



— 次の文章はイギリスの詩人、文明批評家であるT・S・エリオット（一八八八—一九六五）の文化論について述べたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（50点）

エリオットが三十一歳のときに書いた『伝統と個人の才能』において強調するのは伝統である。しかしながら、伝統とはいつたい何を意味するのだろうか。しばしば伝統は進歩と対照的に捉えられる。進歩が未来に向けての社会の変革であるとすれば、伝統は過去からの継承である。その場合、両者のベクトルは逆を向いており、しばしば互いに相容れないものとして捉えられる。エリオットが挑戦したのは、このような伝統と進歩の二項対立であった。

エリオットにとって、一つの文化が真に新たなものを創造するためには、むしろ伝統が必要であった。すなわち、伝統とは過去から受け継ぎ、未来へと手渡ししていくべき何かである。一人の人間、一つの世代は死を免れない。しかしながら、一人の人間や一つの世代がつくり出した文化は、個人の生涯や世代を超えて継承され、やがて将来世代を形成していく。文化が一つの伝統になったとき、それは人間の手によってつくられたにもかかわらず、やがては人をつくり出していくのである。その意味で、伝統があるからこそ、人間はそれに手を加え、変化させ、将来世代へと引き継いでいくこともできる。

エリオットといえば、「それでは行ってみようか、君も僕も、手術台（テーブル）のうえに乘せられて麻酔をかけられた患者のように」（『アルフレッド・プルーフロックの恋歌』）といった前衛的表現で知られる詩人である。しかしながら『伝統と個人の才能』では、むしろエリオットは伝統の意義と重要性を強調している。「伝統とはまず第一に、二十五歳をすぎても詩人たることをつづけたい人なら誰にでもまあ欠くべからざるものといつていい歴史的意識を含んでいる」。すなわち、詩人を含む芸術家とは、自らがホメロス以来の文学的伝統の流れのなかにあることを自覚し、己をこの伝統のなかに位置づけることではじめて、その現代性をエイビン⁽²⁾に感じることができる。さらにいうならば、伝統とは固定したものではなく、現代のなかで新たなものを付け加えることによってのみ更新されるのである。

その意味で、エリオットにとって「個性」とは、それ自体で意味をもつものではなかった。芸術家が自分だけの思いや情緒を

表現したところで、ただ粗雑で凡庸なだけである。むしろ自らの印象や経験を過去からの伝統の諸関係と媒介させ、そこに新たな組み合わせを生み出すことが、詩人をはじめとする芸術家のつとめなのである。伝統とは、(3)である。しかも伝統は、一つの国家のなかに閉じ込められるものではなく、それをはるかに超える時間的広がりや興行きをもつものでなければならぬ。このようなエリオットの伝統論を理解するためには、やはり文人であるG・K・チェスタトンの『正統とは何か』に言及しておくのが有益であろう。ブラウン神父シリーズで知られる作家のチェスタトンは、この著名なエッセイのなかで伝統、さらには

⁽⁴⁾正統(Orthodoxy)なるものについて、独自の議論を展開している。チェスタトンは、唯物論をはじめとする現代の急進的な諸理論が、理性のみを自己完結的に信じることによって、むしろ狂気に陥っていると指摘する。必要なのは、自分一個の理性を超えるものがあることを自覚するとともに、己のうちの相互に矛盾する複雑な感情を知ることである。

そのように説くチェスタトンは民主主義と伝統もまた、けっして矛盾したものではないという。「伝統とは、民主主義を時間の軸にそって昔に広げたものにほかならぬではないか。(中略)何か孤立した記録、偶然に選ばれた記録を信用するのではなく、過去の平凡な人間共通の輿論よろんを信じる——それが伝統のはずである」。パークは、国家は、「現存する者、既に逝った者、はたまた将来生を享ける者の間のパートナークシップ」であると説いたが、チェスタトンもまた、伝統を「死者の民主主義」と言い換える。現在の世代だけを信じるのではなく、過去の普通の人々の感覚を尊重することが、彼にとっての伝統であった。

そのようなチェスタトンにとって正統とは何であったのか。彼にとって正統であるとは、正気であることを指した。すなわち、理性のみを信じて狂気に陥るのではなく、「人間は無限に進歩する」という自己満足的な教説にすぎるのでなく、むしろ超越的な神の前に自らを限定することが彼にとっての正統であった。

神を懐疑するのが自由思想ではなく、むしろこの正統の立場を維持することが、自由と革新につながる。現世だけを信じている人間は、現世そのものを理解できない。現世を超えるものを信じてこそ、むしろ現世を理解し、それを変えていくこともできる。真に世俗的になるためには超越的なものを信じなければならぬと、チェスタトンは説いたのである。

話をエリオットに戻そう。とくに彼の『文化の定義のための覚書』に即して、彼の文化論を見ていきたい。この書における一つの論点は、文化と集団の結びつきにあった。エリオットは、文化についての非個人主義的な理解を示したのである。⁽⁵⁾

このようなエリオットの主張は、同時代でも、反発を呼ぶものであった。例えば、『1984』や『動物農場』で知られる作家のジョージ・オーウェルは『オブザーヴァー』紙に書評を寄せ、エリオットの議論を、階級を擁護するものとして批判した。貴族階級、ブルジョワ階級がそれぞれの文化をもつことを肯定的に論じるエリオットには、たしかに文化的イシシ⁽⁶⁾をともなった階級支配を正当化するものとして誤解される余地があった。

とはいえ、エリオットの議論を単なるエリート文化論として読むことは、表面的な理解ではなからうか。実際、エリオットは、民衆には民衆の文化があり、それを尊重することを説いているからである。問題は、およそ文化というものが、階級などの集団によって担われるのかどうかにある。

エリオットにとって、文化とは単にあれやこれやの活動を指すものではなく、むしろ「一つの統一性ある生き方」(『文化の定義のための覚書』)であった。それはその集団に固有の振る舞いや行動のスタイルだけでなく、美意識や知恵、判断力、さらには料理法にまで及ぶものであった(エリオットは料理法への無関心を、英国における文化衰退の証^{あかし}と見る)。そのような文化はしばしば、集団の特定の一人の人物によって体现されるが、あくまで集団によって維持・発展されるものとエリオットは考えた。エリオットが文化を伝達する上でもっとも重要な経路と考えたのが家族である。もちろん、家族が唯一の経路ではない。学校やさまざまな団体のなかで、人々は一定の規範や作法を身につける。しかしながら、誰しも幼少時の環境に影響され、身につけた文化の影響から完全に逃れ去ることはできない。人が特定の「生き方」を獲得するのは家族においてなのである。「家族がその役割を果たさなくなると、われわれは文化の衰退を覚悟しなければならない」(同前)とエリオットは説く。

エリオットは、このようにして形成された集団の文化が、必ずしも階級やいわゆるエリートと合致するわけではないことを認める。そして、階級についても、つねに参入者と逸脱者がいなければならないと説く。にもかかわらずエリオットは、一国が多様な集団文化によって構成され、それぞれの文化が互いに自閉することなく、密接に結びついていることが重要であると考えた。

それぞれの集団文化が断片化し、相互に意思疎通することをやめるとき、その国全体の文化は崩壊に向かっているのである。

「一国の文化が栄えるためには、国民は統一され過ぎてても、分裂し過ぎていてもいけない」（同前）。このように説くエリオットは、集団のみならず、それぞれの地域が独特な文化を保持することが重要であると考えた。人間の忠誠心は一つの対象だけに向かうものではない。それぞれの人間は己がある国の一市民として感じるだけでなく、ある地域の住民として、その地域に忠誠心を抱くことが重要だからである。

かといって、すでに消え失せたか、消え失せようとしている古い地域文化を復活させることは難しい。エリオットが重視したのは、文化の古い根を土台に、現代に適合した文化をハグクむこと⁽⁷⁾であった。そのような地域の独特な文化が保持され、周囲の文化と調和して互いを富ませると同時に共通文化が発展するとき、一国の文化も豊かなものとなるのである。

⁽⁸⁾ 一国の文化は多様な階級や地域の文化によって構成されると同時に、さらに上位の世界文化と接続していなければならない。

エリオットにとって、アイルランドやスコットランド、ウエールズの文化がイングランド文化と結びついた上で、さらにより大きなヨーロッパの文化のイッタンを担うことが重要であった。逆にいえば、ヨーロッパ文化とは画一的なものであってはならないというのが、エリオットの確信であった。

このことは詩人であるエリオットにとって、本質的な重要性をもっていた。というのも、彼の見るところ、英語の詩の特性と豊かさは、英語がヨーロッパの多様な言語から合成されたものであることに由来するからである。サクソン族（アングル族とともにブリテン島に侵入したゲルマン民族の一つ、英国の基礎をつくる）の韻律、ノルマンフランス（ノルマン・コンクエストの中心となったフランス化したノルマン人）の韻律、ウエールズの韻律、さらにはラテン語やギリシア語の詩の研究によって、英国の詩は豊かなものになったことをエリオットは強調する。

詩を含む、あらゆる文化活動は、近隣諸国で他の言語によって達成された成果を反映するものである。「ヨーロッパの国々が互いに切り離された状態に陥り、詩人たちが、自国語で書かれた文学以外の文学をもはや読まなくなっていたりしますと、詩は多くの国において劣化するよりほかはないということです」（同前）。ヨーロッパ文化の⁽¹⁰⁾は、その⁽¹¹⁾によって

支えられているのである。

(宇野重規『保守主義とは何か』による)

注 G・K・チェスタトン……イギリスの小説家、文明批評家(一八七四～一九三六)。ブラウン神父シリーズ……チェスタトンの著した推理小説。バーク……イギリスの保守思想家(一七二九～一九七)。

〔問一〕 傍線(2)(6)(7)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(1)「伝統とはいったい何を意味するのだろうか」とあるが、エリオットが考える「伝統」の意味にもっとも近い四字熟語を左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 金科玉条 B 日進月歩 C 温故知新 D 不易流行 E 万物流転

〔問三〕 空欄(3)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 過去から未来への継承であり、たえず自らを革新する運動
B 過去と未来の融合であり、たえず自らを拡大させていく運動
C 過去と未来の再考であり、たえず自らを更新し続けていく運動
D 過去の引用による未来の変革であり、たえず自らを省察する運動
E 過去からの飛躍による未来の構築であり、たえず自らを吟味する運動

〔問四〕 傍線(4)「正統(orthodoxy)なるもの」とあるが、筆者によればチェスタトンの考える「正統」とはどのようなものか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 理性を超越した存在に服従することで理性の限界を容認し、現世の欠陥を発見してそれを一新できる。
- B 理性を超越した存在を認識することで理性の領域を把握し、現世の状態を理解してそれを改変できる。
- C 理性を超越した存在に帰依することで理性と感情の矛盾を解消し、現世の構造を尊重してそれを変革できる。
- D 理性を超越した存在を信仰することで理性への過信を払拭し、現世の不安を直視してそれを修正できる。
- E 理性を超越した存在を想定することで理性の意義を自覚し、現世の様態を容認してそれを維持できる。

〔問五〕 傍線(5)「文化についての非個人主義的な理解」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 文化を具現化する個人から成る集団が上下の区別なく統一され、消滅間近の地域文化が現代に即したものに刷新されることで、一国の共通文化が生まれる。
- B 様々な集団や地域が統合される過程で、集団地域に固有の文化が相互に競いあいつつ発展していくことで、一国の文化は独特の文化様式へと統合されていく。
- C 家族を基盤にした集団の文化が、その固有のスタイルを維持したまま融合し、そこへ古い地域文化を復活させることで、一国の文化は集団文化として発展する。
- D 文化を体現する特定の個人が属する集団や地域が、排他的にならず独自の文化を保ったまま周囲の文化と協調することで、一国の文化は豊かなものとなる。
- E 異質な集団や地域が一体化して個人の文化的功績を継承し、それぞれの集団や地域に見合った様式に作り変えていくことで、一国の共通文化は繁栄していく。

〔問六〕 傍線(8)「一国の文化は多様な階級や地域の文化によって構成されると同時に、さらに上位の世界文化と接続していなければならぬ」とあるが、筆者によればエリオットは英詩についてはどのように考えているか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A アイルランド語やスコットランド語、ウェールズ語などの特性がもつとも集約された英語で作詩することは英国の詩の芸術性そのものを向上させ、さらにラテン詩、ギリシア詩など英国以外の詩の研究を行うことで英詩はより優れたものになる。

B 様々な言語の特性が合成された英語で詩が作られていく過程では、サクソン族やノルマンフランス、ウェールズなどの各言語も英語の長所を吸収して洗練され、さらに連動してラテン詩、ギリシア詩を含めた西欧詩の質は高水準に保たれる。

C 英語はサクソン族やノルマンフランス、ウェールズの言語、さらにはラテン語、ギリシア語など多くの西欧語を基盤にしているために、それらの言語の特性をとりいれている英国の詩には、西欧の詩の中でもっとも優れた達成がもたらされる。

D アイルランド語やスコットランド語、ウェールズ語などが英語へと融和し、さらにラテン語、ギリシア語を含めた西欧諸国の言語の特性が英語へ統合されることで西欧詩の長所が英詩に結晶し、そのことが西欧詩全体の発展へとつながる。

E 西欧の多様な言語が集まって成った英語で詩を作る際には、サクソン族やノルマンフランス、ウェールズなどの各言語の特性を深く考察し、さらに英国以外のラテン詩、ギリシア詩などの研究を重ねることで一層豊かな成果が得られる。

〔問七〕 空欄(10)(11)に入れる語句の組み合わせとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|------|-----|------|-----|
| A | (10) | 全体性 | (11) | 偏在性 |
| B | (10) | 複合性 | (11) | 断片性 |
| C | (10) | 一体性 | (11) | 多様性 |
| D | (10) | 特殊性 | (11) | 多元性 |
| E | (10) | 一律性 | (11) | 永続性 |

〔問八〕 本文で述べられているエリオットの文化についての考えとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 伝統とは人間の手で作られ出されたものであっても、歴史的に継承され発展していく中において新たな人間を創出し、未来へと更新され続けることで適時的に価値をおびる。
- B ある文化は一つの伝統にまで昇華されるとき、一国に限定されずに意識されるべき規範となり、伝統を新たな形へと結実させていくことを通して未来へと受け継がれる。
- C 伝統とは民主主義を時間的に拡大してとらえたものであり、過去の平凡な人々の感覚を尊重しそれらを現在の世代の感覚に調和させることで普遍的な民主主義が実現する。
- D 芸術家は自身が様々な文化集団の一員であることを自覚し、集団の特性に自身の個性を埋没させるときに新たな芸術が創造され、文化も新しいものとしてとらえ返される。
- E 多くの集団が形成され文化が構築される際に国はもっとも繁栄するため、伝統的に形成された貴族階級やブルジョワ階級による支配は、集団の特性としてとりわけ尊重される。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

グローバルな資本による世界経済の統合化は、国民国家の基盤を崩し、世界的な規模での人の移動は新たな段階に入った。国境を越える資本は、国民経済の基盤を崩し、国境を越える労働市場を形成してきただけでなく、国家主権をも脅かしている。移民の急激な増加、移民への恐怖は人の移動を再び政治的な争点に引き揚げてきた。ナショナルなものが脅威に晒されているという不安は、人々の生活を守る最後の砦としてのローカルな場所の復権願望を増幅してきた。⁽¹⁾ 国民国家への期待は、福祉国家の時代とは異なるグローバルゼーションという状況のなかで現れてきているのである。

近代において大規模な移民は周期的に繰り返され、さまざまな政治的、社会的な摩擦や軋轢を生み出してきた。しかしそれが移民問題として政治化されるようになったのは最近のことである。

移民問題の政治化とは、一九六〇年代以降の欧米諸国における移民政策の転換を、戦後期の国民国家再編期における人の移動とは断絶し、さらに旧植民地からの人の移動を植民地主義とは切り離し、結果としていわゆる非西欧移民を移民労働者として問題化しようとしてきたことを意味する。ここにあるのは、グローバル化した時代において、国家がいかに移民労働者を管理対象とするのか、言い換えれば移民政策のなかに組み入れるのか、ということであった。

西欧諸国において、いわゆる移民問題として政治的論争になってきたのは、高度経済成長の時代が終わり、失業が大きな社会問題となってからである。第二次世界大戦後の戦後復興から高度成長過程において、かつての植民地をはじめとして発展途上国と呼ばれた南の地域から西欧諸国に多くの移民労働者が移動した。旧植民地からの移民の流入は、植民地支配の帰結であるとともに、戦後復興にとって不可欠な労働力であった。すなわち、西欧諸国が移民労働者の受け入れ国へと転換したのは、植民地支配の終焉と戦後復興期における労働力不足によるものであり、是か非かという問題ではなく、歴史の帰結でもあった。大規模な非西欧からの、すなわち異質な文化的背景を持つと見なされた南の地域からの移民は、西欧諸国において、歴史上初めて直面した課題だと認識された。

ここで言う移民問題とは、いわゆる多文化的／多民族的状況の定着と、戦後の反人種差別を掲げる人権レジームのもとで、非西欧からの「第三世界出身者風」の、文化的に異質な他者との出会いとして現れた。しかしいまでは、移民と呼ばれる人々は人口の二割あるいはそれ以上を占め、幻想としての均質な国民国家像は崩れている。さらに、人種差別は、(2) 主義を掲げてきた戦後体制への挑戦であり、国家としての正統性を失わせるものと見なされている。

多文化主義が戦後体制としての民主主義という (3) 性の根幹といかに折り合いをつけうるのかは、たえず課題とされてきた。しかしこの課題は、何も西欧に限られたことではない。南アフリカのアパルトヘイト廃止だけでなく、アメリカの公民権運動やオーストラリアの白豪主義の転換、そして日本の在日差別など、人種差別が厳しく批判されるなかで、移民政策におけるさまざまな人種差別的制限が、法的あるいは形式上は撤廃あるいは修正されてきた。人権レジームと多文化主義は、形式上は各国において受容され、国家レベルにおいて、さらに社会的にも、基本的には定着してきた、と行ってよい。

グローバル化は、(4) と言われるが、輸送通信技術の発達は、空間だけでなく、境界、そして移動の意味をも大きく変えてきた。国家による越境移動の管理は、これまでも必ずしも成功してきたわけではないが、移動の多様化に応じて、強化されてきている。しかしグローバル化の過程では、ますます多くの人が国境を越えた移動を繰り返す。経済活動の拡がり^{ひろがり}は、もはや国家による国境管理が機能不全となる局面にある。それでは現代の人の移動はどのような特徴を持つのであろうか。

現代は、多くの国が不可避的に越境する移動と関わらざるをえない、共時的・同時代的な人の移動の時代である。人の移動の管理が、二国間あるいは国家間関係としてではなく、グローバルなレジームや世界経済の統合化のなかに組み込まれ、同時代的な共時性を持って、相互に関連して現れているのである。各々の国が固有に行使しうる移民管理の自由度は著しく低下している。それゆえに、各国において、ナショナルな統治とグローバルな移動との乖離^{かいり}がさまざまな軋轢を生み出してきたのである。

人の移動に関わる問題群は、グローバルイゼーションとナショナルリズムとの接点にあり、その共犯関係を明らかにしうる課題として再登場してきた。多文化主義という政策体系をめぐる問題は、そのことを端的に示している。多文化主義は、しばしば政治理念あるいは思想として掲げられてきたが、必ずしも具体的な政策と結び付いてきたわけではなく、当初のカナダやオーストラ

リアの事例を越えて、また文化の政治という枠を越えて、多くの国が共通して認知するようになってきている。

多文化主義は、均質な国民国家という幻想に代替する新しい国民国家の理念として登場した。しかしここでは国民としての統合的な理念は維持され、あくまでももうひとつの国民国家のあり方であり、移民や先住民がナショナルな文化を豊かにする資源として取り込まれることになった。さらに多文化主義を、国家を分裂に導くものとして批判する主張は、極右だけではなく、グローバルイズムのなかで没落するマジヨリティをも惹きつけてきた。

⁽⁵⁾ 政策としての、あるいは国民国家の形態としての多文化主義が色褪せるなかで、一方では多文化主義が、主権国家のなかでの新たな人権として、あるいは国家規範として定着しながらも、他方では移民問題の先鋭化が主要な政治課題となり、バックラッシュと言われる極右の台頭や政治の右傾化を促してきた。欧米の多くの国では、多文化主義はもはや国家理念として主張されることは少ない。しかしこれは、政治の右傾化というよりは、多文化主義が社会的に認知されてきたことによる。

多文化主義が提起した問題は、国民国家の変容、国民の再規定である。移民の観点から、国民国家はしばしば移民国と非移民国との二つに類型化されてきた。しかしいまでは、移民国と非移民国との間にあったさまざまな政策的、法的な差異は次第になくなり、近似化してきた。こうした動向は、グローバル化に対応した国民国家の制度的な再編の動きである。

国民国家としての統合原理が揺らぐなかで、国民を保護するものとしての国家への期待や復権が主張されている。たんに労働力としてだけではなく、観光やビジネスの移動も急速に増大するなかで、移民といわれる人たちへの反感やパラノイアが拡がり、コミュニティ願望やナショナルなものへの期待が高まってきている。移民に対する政策の変化は、政治や経済だけでなく、人やジェンダーに関わる幅広い領域の問題群と結びつき、現代という時代における民主主義や公共性といった問題と深く関わって現れてきている。

(伊豫谷登士翁「グローバルゼーションの時代における「国境の越え方」『歴史のゆらぎと再編』」による)

注 レジーム……制度。政治体制。 バックラッシュ……特定の社会現象に対する反対運動。

パラノイア……妄想症。転じて、根拠もなく過度の不安や恐れを抱くこと。

〔問二〕 傍線(1)「国民国家への期待は、福祉国家の時代とは異なるグローバルゼーションという状況のなかで現れてきている」とあるが、人々は国民国家に何を期待するのか。その説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A 生活の場としての地域を取り戻していくこと。
- B 移民の急増による失業問題への対策を講ずること。
- C 旧来のコミュニティの維持を図っていくこと。
- D 国内に暮らすすべての人々の人権を擁護すること。
- E ナショナルなものをしっかり保持すること。

〔問三〕 空欄(2)(3)には同じ語が入る。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 普遍
- B 合理
- C 完全
- D 中立
- E 理想

〔問四〕 空欄(4)に入れるのもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 世界経済の混乱
- B 地域文化の衰退
- C 時間と空間の圧縮
- D ネットワークの独占
- E 国境の消滅

〔問四〕 傍線(5)「政策としての、あるいは国民国家の形態としての多文化主義が色褪せる」とあるが、その説明としてもっとも

適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 多文化主義を新しい国民国家の理念として掲げることで、移民などマイノリティの文化をマジョリティの文化に吸収させることを狙っていたが、それがうまくいかなかった、ということ。

B 多文化主義を新しい国民国家の理念として掲げたが、多文化主義そのものが国民になじみが薄く、ほとんど関心を呼ばなかったため、理念として掲げることを止めざるを得なかった、ということ。

C 多文化主義を新しい国民国家の理念とすることで、移民などマイノリティの文化がマジョリティの文化と共存共栄関係になると期待していたが、ともに勢いを失ってしまった、ということ。

D 多文化主義を新しい国民国家の理念として導入したところ、反対の動きはあったものの、国民に広く受け入れられて社会通念化したので、もはや理念としては魅力がなくなった、ということ。

E 多文化主義を新しい国民国家の理念として掲げたが、その実現に向けて移民などマイノリティもマジョリティも努力を怠ったので、それぞれの文化が徐々に衰退していった、ということ。

〔問五〕 本文の内容と合致しているものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A グローバリゼーションとナショナリズムは、本来対立する概念であるから、二律背反の関係にあり、グローバリゼーションが進展すれば、ナショナリズムは衰退していく。

B 第二次世界大戦後、発展途上国から多くの移民が流入したにもかかわらず、移民の労働力が戦後復興に貢献している間は西欧諸国で移民問題の政治化は顕在化しなかった。

C 人々の国境を越えた大規模な移動は近代以降繰り返して行われて現代に至っており、各時代にはそれぞれ移民問題が生じたものの、現代まで移民問題の本質は変わっていない。

D 近代の世界になってから経済的には世界的規模で統合化が進み、それに呼応するかたちで文化的統合も行われたが、その反面、政治的にはナショナルな統治が強化された。

E 輸送通信技術の発達により、人々の国境を越えた移動が急増したため、移民管理は多国間の調整機構に委ねられるようになり、その結果、各国の移民管理は容易になった。

三 次の文章は、『落窪物語』の清水寺での局争いの場面である。中将殿は落窪の姫君をいじめた継母への仕返しをする。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

中納言殿の北の方、「中将殿のおりぬさきに」とて、皆歩みのほるほどに、これはた、いと儀式ことに、そよそよ、はらはらと沓^{くつ}すりて、帯刀^{たちばな}さきに立ちて、道なる人々払ふ。車の人々騒ぎ立ちあゆめば、道をふたぎてさらにやらねば、はしたなくて、しばしかい群れて立ちたるを見て、「後追ひなる御物詣なめりや。常にさき立ちたまふとのみ、おぼいたまうためれども、おくれたまふは」とのみ笑へば、誰も誰も、いとねたしと思ふ。とみにもえ歩み寄らず、からうじて局に歩み行きぬ。法師童子一人ありけるは、かの局あるじのおはすると思ひて出でて往ぬ。皆入りたまひて、中将、帯刀を呼びて、「かの人々笑はせよ」とささめきたまふをも知らで、「わが局」と頼みて、来て、入らむとするに、「あらはなり。中将殿おはします」と言ふに、あきれて立てれば、人々笑ふ。「いとあやしや」⁽³⁾「たしかに案内せさせてこそ、おりさせたまはましか」「かくうはの空に御局あるまじかめるものを」「いといとほしきわざかな。仁王堂^{にわうだう}の行ひをせさせたまへ。それぞ、所はひろかなる」と、そら知らずして、帯刀は我と知られむは、いとほしくて、若うはやれる者をはやして、言はせて笑ふに、はしたなきこと限りなし。泣くにもはしたに、わびしと言へば、⁽⁴⁾おろかなり。しばし立てるに、人騒がしく、突い倒しつべくありきちがへば、わびしく、歩みかへる心地も、ただ思ひやるべし。いきほひまさりたらば、いさかひ返しても往ぬべし。いとせむかたなし。足を空にふみて、車に帰り乗りて、ねたういみじう思ふこと限りなし。「なほ、ただに思はむ人かくはせじ。おとどをや、あしと思つたまふらむ。いかなることに当りたまふらむ」と集まりて嘆く中に、四の君、面白の駒言はれて、いといみじと思ふ。大徳^{だいてき}呼びて、「かうかうして取られぬ。いみじき恥にこそあれ。また局ありぬべしや」と言へば、大徳、「さらに今は、いづこのかあらむ。入りぬたるをだに、殿ばらの君達^{きんたち}はおしるさせたまふに、おそくおりさせたまへるが、ましてあしきなり。いかがせむ。御車ながら明かさせたまふべきなり。⁽⁵⁾よろしき人ならばこそ」⁽⁶⁾「もしや」と言ひはべらめ、ただ今の一の者、太政大臣もこの君にあへば、音もせぬ君ぞや。御妹、限りなく時めきたまひて持たまへり。⁽⁷⁾わが御おほえばかりと思すらむ人、うちあふべくもあらず」など言ひて往ぬれば、かひな

し。おりなむと思ひて、六人まで乗りたりければ、いと狭せまくて身じろきもせず。苦しきこと、落窪の部屋に籠りたまへりしにも、まさるべし。

〔落窪物語〕による)

注 中納言殿の北の方……落窪の姫君の継母。 中将殿……落窪の姫君の夫。 帯刀……中将殿の乳兄弟。

仁王堂……金剛力士を安置する堂。 四の君……落窪の君の異母妹。 右近の少将(中将殿)の策略によって兵部の少輔

(面白の駒)と結婚させられる。 面白の駒……馬面で性格も変わっているため、人々から「面白の駒」と馬鹿にされ

ている。 大徳……徳の高い僧。

〔問二〕 傍線(1)(2)(5)の解釈として、もつとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) 「はしたなくて」

- | | |
|---|---------------|
| A | 愛想のない表情のまま |
| B | とても行儀の悪い格好で |
| C | どうすることもできなくて |
| D | 道の端しか空いていないので |

(2) 「いとねたし」

- | | |
|---|-----------|
| A | とてもうらやましい |
| B | とても腹立たしい |
| C | とてもすばらしい |
| D | とても眠たい |

(5) 「よろしき人」

- | | |
|---|-----------|
| A | そこその身分の人 |
| B | とても性格の良い人 |
| C | 良い気分にいる人 |
| D | 物わがりの良い人 |

〔問二〕 傍線(3)「たしかに案内せさせてこそ、おりさせたまはましか」の口語訳として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A しつかり様子をご覧になってから、車をお降りになればよかつたのに
- B しつかり様子をご覧になってから、車から降りさせればよかつたのに
- C しつかり様子をご覧になってから、車を降りればよかつたのだろうか
- D しつかり様子を見せてから、車から降りさせればよかつたのに
- E しつかり様子を見せてから、車をお降りになればよかつたのに
- F しつかり様子を見せてから、車を降りればよかつたのだろうか

〔問三〕 傍線(4)「言へば」の主語として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 中納言殿の北の方
- B 落窪の君
- C 法師童子
- D 中將殿
- E 帯刀
- F 語り手

〔問四〕 傍線(6)「もしや」の解釈として、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A どうかお部屋を見させてくださいませんか。
- B ひよつとしてお部屋を間違っていますか。
- C よろしければお部屋をお譲りしましょうか。
- D 他になければお部屋を一緒に使いませんか。
- E もし気が向いたらお部屋を交換しませんか。

〔問五〕 傍線(7)「時めきたまひて持たまへり」の説明として、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 中将殿の妹君は、帝の寵愛を受けているので、後宮で権勢を誇っている。
- B 中将殿の妹君は、帝の寵愛を受けていて、お世継ぎの皇子も生んでいる。
- C 中将殿の妹君が、帝の寵愛を受けているので、中将殿には権勢がある。
- D 太政大臣の妹君が、帝に目をかけられている中将殿に好意を持っている。
- E 太政大臣の妹君は、帝の寵愛を受けているのに、中将殿に関心を持っている。

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 本文の所々に、語り手が登場人物の心情などを推測する記述がある。
- イ 中将殿が局争いに勝ったのは、当代一の権勢家であるためである。
- ウ 北の方は、自分に嫌がらせをしているのは落窪の姫君だと感じている。
- エ 帯刀は、北の方への仕返しをしたくないが、仕方なく中将殿に従っている。
- オ 北の方がひどい目にあうのは、夫である中納言の悪行の報いだと描かれている。

